

# 井上智太郎著 『金正恩の核兵器—北朝鮮のミサイル戦略と日本』

ちくま新書, 2023年

本書は、ソウル、ワシントン、北京で特派員を勤め、外務省・防衛省担当の経験もある井上智太郎氏が、北朝鮮の核ミサイル開発の初期段階から現在に至るまでを包括的に考察した、新書としてはかなり重厚感のある一冊である。特に本書は、①北朝鮮の公式報道、②各国の政府、国際機関、シンクタンク等の報告書、③北朝鮮の政府関係者や各国政府関係者、脱北者への直接取材や独自に入手した資料を用いている。このうち、3つ目の独自取材による資料は、記者である筆者だからこそ提供できる情報である。また、この情報に信ぴょう性を持たせるために①や②を有効的に活用することで、より立体的に北朝鮮の現状や核・ミサイル開発を分析しているといえる。ここが本書の最大の強みであろう。

本書は、主に5章で構成されている。まずは、それぞれの章について、内容を簡単に紹介しながら、議論のポイントについても指摘したい。そのうえで、本書全体の所感について述べたい。

第1章「核武装の動機と秘密ネットワーク」では、北朝鮮がなぜ核開発に着手したのかについて歴史的な背景を追いながら紐解いている。朝鮮戦争において、米軍が核兵器を使用する可能性があったことと、それにより北朝鮮内での不安が広がったことによって、金日成が核開発へと舵を切ったことが指摘されている。北朝鮮に対する米国の核の脅威は、休戦協定後も続き、ソ連の支援で1950年代に核開発に着手した。南アフリカ、イラク、リビア、ウクライナの例は、核がなければ自国の主権と安全を守ることができないという北朝鮮の核開発の意思をより強固にするものであった。1970年代に核兵器の独自開発を最終的に決定した北朝鮮は、ソ連の支援やパキスタンとの取引を通して開発を進めていった。1980年代

には、核開発のインフラがほぼ完成し、北朝鮮は、運搬システムである弾道ミサイルの開発を本格化させる。第1章の後半では、外国からの支援だけでなく、北朝鮮内のどの機関や人物が、核ミサイル開発に関わっており、どれだけの資金が動いているのかについて説明している。北朝鮮の独裁体制と国家総動員で核ミサイル開発に取り組んでいる様相が垣間見える部分である。

第2章「『前線』となる日本—米朝危機の内幕」では、核ミサイル開発を加速化させる北朝鮮に対し、米国がどのような軍事的オプションを掲げていたかについて書かれている。また、米国のオプションが日本に与える影響などが綴られている。オバマ政権は、北朝鮮に対するサイバー攻撃やレーザー攻撃などの先制攻撃をしかける作戦について検討していた。しかし、北朝鮮の核ミサイル技術の進化は、米国が持つオプションの実効性を弱めていったといえる。トランプ政権下でも、先制攻撃計画として「ブラディ・ノーズ作戦」が検討された。この際、軍高官がトランプに対し、「水爆使用を含め最後まで戦い抜く用意がなければ、なんの行動もとるべきではない」と論じた部分は、米朝危機の特徴をよく表している。米国のこのような判断は、自衛的核抑止が効果的であると北朝鮮に思わせることにつながり、北朝鮮の非核化をより困難にすることを示している。

第3章「金正恩の誤算—往復書簡を読み解く」では、トランプ政権との米朝会談を中心に、北朝鮮がどのように交渉に臨んだのか、北朝鮮が本当に非核化をする意思があったのかについて議論している。「朝鮮半島の非核化」が、実際にどのような状態を指しているのか、非核化と体制の保証が交換条件となりうるのか、米朝会談が非常に不安定な状態で進められていたことがうかがえる章

となっている。ここで筆者は、とある外交筋の証言を紹介している。「体制保障も敵視政策の撤回も伸縮自在の概念だ。交渉に出てくる北朝鮮の外交官らも明確な定義は持ち合わせていないだろう」というのである。この指摘は、米朝交渉の難しさだけでなく、北朝鮮の核問題全体を扱う際にも重要な論点であろう。

第4章「北朝鮮の核ドクトリン—報復から先制へ」では、北朝鮮による戦術核の定義、戦術核弾頭を運搬する弾道ミサイルの多様化、核ドクトリンについて分析し、「北朝鮮が実際に核を使う可能性があるのか」という本書の核心的テーマを扱っている。北朝鮮は、核実験を初めて行った2006年時点では、核兵器の先制不使用を謳っていた。しかし、金正恩政権に入ってから、その方針が曖昧になってきていると指摘する。2013年の法令や2016年1月の核実験における声明では、条件付きの先制不使用、つまり、場合によっては先制使用も辞さないというスタンスに変化しつつある。さらに北朝鮮は、2022年に新たな法令を採択し、核兵器の使用条件を示すとともに、核保有国としての地位が揺るぎないものであることを改めて強調したのである。このように、北朝鮮による核兵器使用の敷居は、金正恩政権下で着実に低くなってきている。本章の後半では、北朝鮮が実際にその核ドクトリンに沿って核兵器を運用できるのかという問題について論じている。NC3の問題、多種多様な攻撃手段によるエスカレーションの可能性について、近年の北朝鮮の実験や報道を基に整理分析している。筆者は、戦術核の定義に関する議論で本章を締め括っている。そもそも論ではあるが、北朝鮮が戦略核であれ、戦術核であれ、核を使用するならば、「戦略的なゲームチェンジャー」となるというジェームズ・マティス国防長官の言葉を引用している。それを踏まえて、既述の分析から何が言えるのか? 「北朝鮮が実際に核を使う可能性があるのか」という問いについて筆者の答えは定かでない。

第5章「軍拡の時代」では、米中対立が激化する「新冷戦」構図における北朝鮮の立ち位置について分析している。中朝の歴史を辿りながら、両国関係が必ずしも一枚岩ではないことを指摘する。

また、台湾有事と朝鮮半島有事が切っても切り離せない安全保障上の懸念であることを、米国だけでなく、中朝側も認識しているという指摘は、今日の東アジアの安全保障環境を概観するうえで重要な点である。最近の朝口の蜜月具合についても言及しているが、北朝鮮にとっては、やはり中国が最大の後ろ盾であることに変わりはない。一方で、この様な北朝鮮の弾道ミサイルが高度化・多様化するなかで、日本と韓国は、それぞれ防衛能力の強化に努めるとともに、大きな政策および戦略の転換を迫られている。

以上のことから、本書は、新書でありながら非常に広範囲の議論をカバーしており、評者も多くの学びを得た。ここからは、評者が感じたいいくつかの疑問点を投げかけたい。まずは、本書を通じて「金正恩の核兵器」をどう捉えるべきかという筆者なりの答えについてである。本書では、北朝鮮の核を、外交のカード、現状変更のためのツール、抑止および自衛、体制と不可分なものとして論じている。筆者は、『労働新聞』や「朝鮮中央通信」を引用し、北朝鮮が核開発や使用についてどのような立場をとっているのか紹介しているが、その中で、金正恩が最も重視する点はどこなのか、何が基軸となるのか。これらが示されることで、第4章における「北朝鮮が実際に核を使う可能性があるのか」という問いへの答えが明確になるのではないかと思われる。

二つ目に、日韓協力についてである。北朝鮮がもし戦術核を使うとすれば、その対象は韓国である可能性が非常に高く、その場合、日本が朝鮮半島有事に自動的に巻き込まれることとなる。筆者も、半島有事における日本の国連軍後方基地としての役割について言及しており、日本は半島有事の影響から逃れることはできないことを指摘している。筆者は、第5章で、日本と韓国それぞれの取り組みについて言及しているが、日韓安全保障協力については、ほとんど論じられていない。ここは、紙面の都合もあるかと拝察するが、ソウル特派員経験に基づく見解をうかがいたいところである。

最後に、構成に関してである。本書は、主に5つの章で成り立っているが、様々な事項を様々な

視点で分析を行なっているため、話題が前後し読者が混乱する可能性がある。評者としては、第2章を第4章の後に置き、第5章と繋げるかたちでの展開が望ましいのではないかと思慮するところである。北朝鮮の核開発に関して、歴史的背景、米国側の視点や分析、そして国際法に基づいた分析など、筆者が多角的な考察を試みる一方、分析の軸が見えづらくなってしまったのではないかと思われる。しかし、論文のような筋の通った分析の軸だけでは語れない要素を盛り込み、様々な視

点から北朝鮮の核開発を捉えようとしたのが、筆者の挑戦であり、本書の意義でもあると思われる。

総じて本書は、北朝鮮の今を理解するうえで、非常に多くの視座を示しており、日本が直面する外交安全保障問題に関しても重要な論点を投げかけている。研究者の端くれとして、一読者として、本書が広く一般に読まれることを願って拙文を締めくくりたい。

(浅見明咲 防衛研究所)